

時がある

伝道者の書 3章 1-15節

はじめに

今日は、召天者記念礼拝です。この教会の関係者で、先に天に召された方々を覚えて、神様を礼拝します。始めに、この教会の教会員で天に召された方々を紹介します。馬淵聡子姉（2005年召天）、高橋英子姉（2011年召天）、工藤忠道兄（2018年召天）、矢澤勝美姉（2018年召天）、矢澤昭一兄（2018年召天）、玉山ヨシ子姉（2019年召天）、坂井宏明長老（2020年召天）。その他、この教会の教会員の関係者で、天に召された方々を紹介します。山田朝子姉（山田祐三兄の奥様、2006年召天）、河尾満志兄（河尾夫妻の次男、2016年召天）。

1. 「時」を定める神

今日の聖書箇所には、「時」という言葉が三十回出てきますので、「時の詩（うた）」と呼ばれます。1節には、「**すべてのことには定まった時期があり、天の下のすべての営みには時がある**」とあります。私たちの人生に起こるすべての出来事には、定まった「時期」「時」があると、伝道者は言います。また私たちの人生だけでなく、「天の下のすべての営み」ともありますから、世界中に起こるすべての出来事にも、定まった「時期」「時」があると、伝道者は言うのです。つまり、それは、私たちの人生や世界中に起こるすべての出来事に、「時」を定めた存在がいることを示しています。それは、今日の聖書箇所を見ると、「神」という存在です。11節には、「**神のなさることは、すべて時にかなって美しい**」とありますし、14節には、「**神がなさることはすべて、永遠に変わらない**」とあります。つまり、この世には、神様がおられて、その神様が私たちの人生や世界中に起こるすべての出来事に「時」を定めていて、その「時」になると神様がみわざを行うということです。

聖書全体を見ると、この神様は、「主」と呼ばれる唯一のまことの神様であって、天地を造られた方です。永遠の昔から存在しておられ、時至って、宇宙や地球や自然、植物や動物や人間を造られた方です。この神様が、永遠の昔からすべての出来事に「時」を定めておられると言うのです。聖書によれば、神様は目には見えませんが、確かに存在しておられ、すべての「時」を定めて、私たちの人生と世界の歴史を導いておられるのです。

2. 神が定めた「時」の特徴

では、その神様が定めた「時」には、どのような特徴があるのでしょうか。今日の聖書箇所を見ると、五つの特徴があるように思います。

まず一つは、神様が定めた「時」には、良い時も悪い時もあるということです。2-8節を見ると、「～に時があり、～に時がある」という言葉が十四回繰り返されていますが、それらはどれも良い時と悪い時がペアになっています。例えば、「**生まれるのに時があり、死ぬのに時がある**」「**泣くのに時があり、笑うのに時がある**」「**愛するのに時があり、憎むのに時がある**」「**戦いの時があり、平和の時がある**」など。神様が定めた「時」は、良い時ばかりではないのです。「生まれる」「癒やす」「建てる」「笑う」「踊る」「抱擁する」「愛する」「平和」などの良い時ばかりを定めてくれれば良いのに、神様は「死ぬ」「泣く」「嘆く」「あきらめる」「投げ捨てる」「裂く」「憎む」「戦う」などの悪い時も同時に定めておられるのです。

私たちの人生や世界に起こる出来事には、良い時もあれば悪い時もあるのです。それが、神様が定めた「時」なのです。私たちの人生は、決して良い時ばかりではありません。しかし同時に悪い時ばかりでもないのです。良い時もあれば、悪い時もある、それが私たちの人生であり、世界の歴史なのです。

二つ目の特徴は、14節にあるように、「**神がなさることはすべて、永遠に変わらず**」、「**それに何かを付け加えることも、それから何かを取り去ることもできない**」ということです。神様が定めた「時」は、私たち人間が付け加えることも、取り去ることもできないのです。私たちは、時間を管理します。そして予定を立てます。しかし必ずしも、予定通りにはいかないことが多いです。急な予定が入ったり、体調が整わなかったり、予期せぬ様々なことが起こります。私たちの定めた「時」は、必ずしも実行できないのです。私たちには、「時」をコントロールすることができないのです。しかし、神様が定めた「時」は、永遠に変わらず、誰もその「時」を変更することはできないと伝道者は言うのです。

三つ目の特徴は、15節に「**今あることは、すでにあったこと。これからあることも、すでにあったこと**」とあるように、歴史は繰り返されるということです。伝道者の書1:9-10にも、こうあります。「**昔あったものは、これからもあり、かつて起こったことは、これからも起こる。日の下には新しいものは一つもない。『これを見よ。これは新しい』と言われるものがあっても、それは、私たちよりはるか前の時代にすでにあったものだ**」。歴史は繰り返されるのです。今、私たちが経験していることは、過去に誰かも同じ経験をしているのです。「私が初めて」あるいは「私だけが経験している」ことなど、一つもないのです。過去に、同じ経験をしている人が必ずいるのです。悪いことが自分の身に起こった時、私たちは「何で自分だけ？」という心境に陥りがちです。しかし、伝道者によれば、「私だけが経験している」ことなど、この世に一つもないのです。必ず誰かも、自分と同じような経験をしているのです。決して自分だけじゃないのです。過去や少し広い世界に目を向ければ、必ず自分と同じ経験をしている人がいるはずなのです。

四つ目の特徴は、11節にあるように、「**神のなさることは、すべて時にかなって美しい**」ということです。ここでの「美しい」という言葉は、「完全」「最善」という意味でしょう。神様が定めた「時」は、完全であり、最善なのだと言道者は言うのです。神様が定めた「時」というのは、良い時ばかりではなく悪い時もあります。「死ぬ」「崩す」「泣く」「嘆

く」「あきらめる」「裂く」「憎む」「戦う」などの「時」があります。しかしそれらの時も、神様にとっては完全であり、最善だと言うのです。ここには、主なる神様こそ全知全能の神であり、間違ったことをするはずはないという信仰があるのでしょうか。

五つ目の特徴は、同じ11節にあるように、「**人は、神が行うみわざの始まりから終わりまでを見極めることができない**」ということです。神様が定めた「時」は、私たち人間には知ることはできません。「なぜ今、こんなことが起こるのか」、その「時」の意味を私たち人間は知ることはできません。私たちは、神様がすべての「時」を定めている、そして神様が定めた「時」は、完全であり、最善だと教えられています。しかし「なぜ今、こんなことが起こるのか」という、その「時」の意味は、私たちには隠されているのです。私たちは、その「時」の意味が分からずに苦しむのです。

3. **神が定めた「時」の中で生きる私たち**

このように神様が定めた「時」は、良い時もあれば悪い時もあります。そして、その「時」を、私たち人間にはコントロールすることができません。またその「時」の意味を知ることもできません。ただ私たちには、それが完全であり、最善であると信じるほかありません。

私たちは、神様が定めた「時」の中で生かされています。神様が定めた「時」から逃れて生きることはできないのです。では私たちは、神様が定めた「時」の中で、どのように生きれば良いのでしょうか。

14節にはこうあります。「**人が神の御前で恐れるようになるため、神はそのようにされたのだ**」。伝道者は、人が神様の定めた「時」に生かされているのは、神様を恐れるようになるためであると言います。私たちは、自分にはどうすることもできない「時」の中で生かされています。それは、その「時」を支配している神様という存在を認めて、神様を恐れるようになるためなのです。私たちは、「時」をすべて自分の思いのままコントロールできて、私たちの人生がすべて良い時であれば、ただ自分だけを信じて生きようになるでしょう。私たちには、自分にはどうすることもできない「時」がある、良い時ばかりでなく悪い時もある、その「時」がなぜ起こるのかその意味も分からない、そういう自分の限界を知る時に、私たちは初めて「神」という存在に目を向けるようになるのではないのでしょうか。「神様を恐れる」というのは、必ずしも神様を怖がることではありません。旧約聖書では、「神様を信じる」「神様を愛する」「神様に従う」、そういうことを「神様を恐れる」という一言で表現したのです。

私たちの人生には、良い時もあれば悪い時もあります。そして、「なぜ今、こんなことが起こるのか」ということも経験します。神様が定めた「時」は「美しい」「完全」で「最善」だと言われます。しかし私たちには、すぐにそれが「美しい」「完全」「最善」と思えない時もあります。しかし、私たちがもし、神様を恐れて生きるなら、神様を信じて、神様を愛して、神様に従って生きるなら、やがてそれが「美しい」「完全」「最善」と

思えるようになるのではないのでしょうか。使徒パウロは、ローマ 8 : 28 でこのように言っています。「**神を愛する人々、すなわち、神のご計画にしたがって召された人たちのためには、すべてのことがともに働いて益となることを、私たちは知っています**」。パウロは、神様が定めた「時」の中で、なおも神様を信じて、愛して、従って生きるなら、私たちの人生に起こるすべての出来事は、益となると言います。それはつまり、神様が定めた「時」は、すべて美しかった、完全であった、最善であったと思える「時」が来るということではないのでしょうか。

有名な賛美に「御手の中で」という曲があります。その曲の歌詞は、次のようなものです。「**御手の中で、すべては変わる賛美に。わが行く道を導きたまえ。あなたの御手の中で。御手の中で、すべては変わる感謝に。わが行く道に現したまえ。あなたの御手のわざを**」。私たちは、神様が定めた「時」の中で生かされています。その時の中で、私たちが神様を恐れて生きるならば、すべては賛美に、すべては感謝に変えられていくのです。たとえ今はそう思えなくても、神様が定めた「時」は、美しかった、完全であった、最善であったと思える時が来るのです。

おわりに

最後に、11 節の「**神はまた、人の心に永遠を与えられた**」という言葉に心を留めて終わりたいと思います。私たち人間には、「永遠」を思う心が与えられています。私たちには、死後を思う心が与えられているのです。イエス様はこう言われました。「**わたしは彼らに永遠のいのちを与えます。彼らは永遠に、決して滅びることがなく、また、だれも彼らをわたしの手から奪い去りません**」。誰でもイエス様を神と信じ、自分の救い主と信じる者は、「永遠のいのち」を与えられます。「永遠のいのち」とは、永遠に神様と共にいること、永遠にイエス様と共にいることです。神様もイエス様も、今は天国におられます。その意味で、「永遠のいのち」は、天国に行くこととも言えます。

私たち人間には、「永遠」を思う心が与えられているのです。死後に、天国があるという思いが与えられているのです。先に天に召された方々も、今は神様とイエス様と共に天国にいと、私たちは思うことができます。

先に天に召された方々は、神様が定めた「時」に天に召されて行きました。その「時」を私たちは自由にコントロールできませんでした。「神様なぜ今なのですか？」と思った方もおられたことでしょう。しかし、もし私たちが神様を恐れて生きるなら、その「時」の意味が少しずつ見えてくるのではないのでしょうか。やがて、確かに神様の「時」は、美しかった、完全であった、最善であったと思える時がくるのではないのでしょうか。

私たちには、「永遠」を思う心があります。私たちがもし、神様を恐れて生きるなら、やがて先に天に召された方々と天国で再会することができるのです。「永遠」を思う心こそ、私たちの希望ではないのでしょうか。

天におられる私たちの父なる神様。

私たちの人生や世界中で起こるすべての出来事には、神様が定めた「時」があります。私たちは、あなたの「時」の中で生かされています。私たちは、あなたの「時」をコントロールすることも、あなたの「時」の意味も知ることはできません。しかし、ただただ、あなたの「時」は、「美しく」「完全で」「最善で」あると信じさせてください。たとえ今は、あなたの「時」の意味が分からなくても、あなたを恐れて生きることができますように。そして、「永遠」の時の中で、先に天に召された方々と、再会することができますように。その希望を胸に、あなたの「時」の中を生きていくことができますように。

この祈りを私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。